
ABO式殺人事件

はばっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A B O 式殺人事件

【Nコード】

N 3 2 9 5 E

【作者名】

はばっち

【あらすじ】

落雷が原因の死亡事故と思われた事象が、巧妙に仕組まれた密室殺人だった。あなたにこの謎が解けますか？（アオつとけ、アオつとけ）一応推理小説です。格闘シーンがありますし、人死にが出ます。ご注意ください

ブローグシーン1 探偵登場（前書き）

このお話はフィクションです、実在の人物団体等とは一切関係ありません。一応推理小説です。後半格闘シーンがありますし、人死にが出ます。ご注意ください。この話で描写されている内容を模倣しないでください。電気関係の法律に違反する可能性があります。

プロフィールシーン1 探偵登場

登場人物

江戸川 橋 (きょう、と読む) 身長183cm 体重62kg
27歳

そこそこしまった体つき

動きに切れがあるが、持久力にはやや難有り。

鳥にたとえるならオウム

ヤマハのSRX600に乗っている。

紅茶が好き。好きな音楽は、エアロスミス。^{バンド}押入を開けるとエアロスミスの海賊版のCDや、ビデオでいっぱい。

大塚 絵美 (えみ) 身長153cm 体重?kg
24歳

スポーツ万能 特にスキー、テニス。

やや小柄ながらしなやかで伸びのある体

鳥にたとえるなら雲雀

レモンティーが好き。好きな音楽は、^{グループ}カーペンターズ。

押入を開けると少女漫画でいっぱい。宝塚歌劇団が好きだったりするのだが、これは妹にも内緒だ。

護国寺 英吉 (えいきち) 身長178cm 体重74kg
22歳

がっしりした体つきだが、喧嘩は苦手。

気は優しく力持ち、しかしスピードに欠ける

鳥にたとえるならミミズク、フクロウ

ミルクティーが好き。アニメが好き(ちょっとオタク入ってる)。押入を開けるとアニメのDVDでいっぱい。

マウンテンバイクを乗り回して出来たぶつとい足と引き締まった尻が自慢。

大山 治 (おさむ) 身長158cm 体重5

5kg 29歳

仙川警察署刑事 小柄ながら、柔剣道合わせて7段
せっかちで、早とちりが多い

鳥にたとえるなら桜文鳥

コーヒーが好き。ヘビースモーカーなのが江戸川たちと行動をと
もにしている間は、タバコが吸えない。

格闘ゲーム好きで自宅にでっかい筐体を持っている。押しれを開け
るとゲームの基盤でいっぱい。

ビー

黄色の雄のオウム 5歳

ときどきタイミング良くしゃべる

大塚 直美 (なおみ) 身長175cm 体重?k

g 18歳

絵美の、妹。六歳年下。(絵美が高校三年生の時、小学六年生)

途中出場な感じですな。

石橋高校三年、現役バリバリ女子高生。

鳥にたとえると、体型はツバメ、性格はスズメ。

結構酒飲みである、(未成年のくせに)これは両親には秘密だ。

しかし、タバコは、嫌い。でも煙たくなるときもあるらしい(なん
でしょね?)。

雷雲、夕立、落雷。

夕焼け、日没、熱帯夜。

そして、夜明け。

プロローグ

駅から続く長いアーケード街、まだ閉まったままのシャッターが大部分である

肩を竦め俯きがちなサラリーマンの間を、枝から枝へ飛び移る雀のように、

一人の女性が元気よく歩いていく。

年の頃は二十代半ば、ショートカットの小柄な体は、しかし、地球の重力を全く苦にしていなかったかのように軽やかだ。

「もう、どうしてこんなに遠いんだろ、ダイエットには、いいかもしれないけど。」

朝とはいえ8月の太陽は強烈だ、少し汗ばんできた。

ブラウス、パンツルックにスニーカー、どうやら出勤の途中のようだ。

川越街道を渡り、小さな商店の間の細い道を抜けると、急に太い道にでる。

交通公園の隣の貸しビル…味もそっけもない直方体の三階建て…の二階、東西に分かれる二つの貸し事務所の一つ、西側の部屋。

そこが彼女の仕事場、江戸川探偵事務所である。

シーン1 探偵登場

「江戸川探偵事務所」

鍵を開け中にはいる

「おはよう！、ビーちゃん」

「オハヨー！」

少し聞き取りにくい返事の主は黄色いオウムである
小首を傾げて片目でこちらを見る

「うーん、いい羽ヅヤ！、今日も美男子ね」

机の下からローヒールを取り出し、素早く履きかえ、
タイムカードを押し、カーテンを開き、手早く机の上を拭く。
オウムの餌を足し、水を換えてやり、
床に掃除機をかけ、モップをかける。

大して広くないテナントだが、手早くやっても10分はかかって
しまう。

絵美がモップをしまっていると、大きな足音が階段を昇ってきて、

「おはようございます絵美さん、先生はまだいらしてないのかい？。

」

高めの声には似合わない、がっしりした体格の持ち主が、ドアか
ら入ってきた。

（窓の外からバイクのエンジン音が聞こえてきた、低音がよく響い
て、音がばらけている。）

「おはよう護国寺君、遅刻ぎりぎりよ。」

「チコク！、チコク！」

名を呼ばれた青年は身を竦めて、恐縮した、その姿はまるで梟か木菟である。

年の頃は二十代前半、大きい体の割に、気が小さいように見える。なで肩と、もしやもしやした癬っ毛の間には、時に高校生と間違われることもある童顔があり、

その顔面の上で、黒縁の眼鏡と、眼鏡ごと外れそうな団子鼻が自分の存在を盛んにアピールしていた。

（建物の裏の駐輪場でバイクのエンジン音がやんで、外されたヘルメットが、その持ち主の片手にぶら下げられて階段を上がってくる。）

「チコク！、チコク！」

ドアが開けられた。

「ビー、あんまりいじめるな、僕の立場も悪くなる。」

最後に入ってきた人物こそ、この事務所の所長、江戸川 橋 である。

年の頃は二十代やや後半、やせ形の長身。

小首を傾げるしぐさなどは、彼のペットにそっくりである。

「おはようございます、先生」

「おはよう絵美ちゃん、英吉君」

彼は会話を終わらせて、彼のデスクにおさまった。

こうして又、江戸川探偵事務所の一日が始まるのだ。

ブローグシーン1 探偵登場（後書き）

「アイス」物はちよつと休憩して、オクラにしていた推理小説モドキの蔵出しです。

「アイス」物を期待した方、すいません。

一応の完結を見ているので、更新は定期的にできるかと思っています。時代に即した手直し（LD→DVD等）をしながら、公開していこうと思います。

某小説大賞に送りつけて、何のリアクション返ってこなかった情けない代物ですが、読んでいただければ幸いです。

読んでくださったあなたを少しでも楽しませることができていればいいのですが。

登場人物たちの名前は、東武東上線や東京メトロ有楽町線の駅名です。

あと、もうひとつ混ぜてあるんですが、ちよつと苦しいんで内緒です。

（タイトルからわかりますか？）

いまさら公開する訳は、また「絵美」ちゃん達に会いたくなっただけです。

それで、彼女達で短編を書きたくなってきたからです。

（長編は多分無理です）

第四（最終）稿の更新日時が、

1998/09/24 ですよ。ほぼ10年前だ・・・

シーン2 大山刑事来訪／シーン3 エアコンは科学の勝利（前書き）

このお話はフィクションです、実在の人物団体等とは一切関係ありません。一応推理小説です。後半格闘シーンがありますし、人死にが出ます。ご注意ください。この話で描写されている内容を模倣しないでください。電気関係の法律に違反する可能性があります。

シーン2 大山刑事来訪／シーン3 エアコンは科学の勝利

シーン2 大山刑事来訪 江戸川探偵事務所 8月26日

(火)

夏の昼下がり、エアコンの使われていない室内はかなり暑い。

招かれざる来客の大山刑事は、事務所の中に入って開口一番、

「おはようさん、ここは相変わらず暑いな。エアコンの持ち腐れだね。」

絵美が、仕事の手を休めず、顔も上げずに返事をした。

「ビーにはこれで、ちょうどいいの」

「オウムは本来、亜熱帯産なんです。冷房なんか入れたら死んじやうわ」

「大塚君……」

英吉が、口を挟んだ。

「そう、そう、いやなら帰ってください、仕事のじゃまです。それに、エアコンなら、ちゃんと仕事しましたよ、冬に。」

「護国寺君も冷たいなあ、わかりましたよ我慢しますよ」

「何のご用ですか？、大山さん」

全く気配を感じさせずに、江戸川が傍らに来ていた。

大山は、来訪の目的を、思い出したようだ。

「江戸川君、昨日の雷雨を覚えているかな」

江戸川は、アメリカの某SFテレビドラマの航宙士よろしく片眉を上げた。

「石橋本町に雷が落ちたらしくてね、人が一人死んでるんだ」

「君も聞いたことあるだろう？、常盤三四郎さん」

「小説家の？」

江戸川は、怪訝な顔をして訪ねた。

「雷に直撃したんですか？、運の悪い人ですね」

「いや、室内なんだが」

「？、何故室内で？」

「詳しい原因はまだ調査中なんだが、常盤さんは、低肺で、機械を着けていたんだ」

「酸素濃縮装置ですか？」

「そう、それだ。そいつが落雷のせいで、壊れてしまったというこ
とらしいんだ」

「ま、直接の死因は、心不全ってことになるんだろうが、ね」

「君は、電気に詳しくあっただろう？、ちょっと協力してほしいんだ」

「そうですか。事情は解りました」

「今、現場には、入れますか？」

「ああ、入れるよ、一緒に来てくれると有り難い」

「いいでしょう」

「絵美ちゃん、英吉君、ちょっと出るから後よろしく」

「はい、先生、いつてらっしゃい」

ドアが閉まると英吉は絵美に言った。

「大した事件でもないのに、どうしていつも来るんですかねえ」
「暑いだの、コーヒーも無いのかだの、文句ばっか言うくせに」
「何が目当てなんですかね？」

「下らないこと行ってないで働きなさい！」

「向井原の浮気調査はどうなってるの!？」

「今、行きます！」

英吉は、へその辺りを隠して言った。

「くわばら、くわばら」

「護国寺君!!」

絵美の雷が落ちた。

シーン2・3 歩いて移動中　（中山駅踏切辺り）

夏の強烈な太陽に照らされて、二人の影は極端に短い

江戸川は、大山に尋ねた。

「常盤さんが亡くなったとき、ご家族の方はどうしてたんですか？」

「常盤さんは、一人暮らしでね、お手伝いさんが居たらしいんだが、

「常盤さんに勧められて早く帰ったらしい。傘を借りてね」

「常盤さんは、一人だったんですか」

「ああ」

「ご家族の方は？」

「両親はとうに死んでいる、奥さんも早世している。子どもは三人いて、上から、女、男、女」

「長姉の方は、結婚している。長男も結婚して、独立している。一番下の妹は、近所のアパートに独りで住んでいる。常盤さんは一人で暮らしていたんだ」

「まあ、身の回りのことは、お手伝いさんもいたしな」

「雷が原因って言うてましたよね」

「常盤さんの建物か、近所に落ちた雷が、アース線から逆流したら

しいんだ」

「しかし、暑いなあ」

大山は、ハンカチを取り出し、しきりに顔の汗を拭く。小柄なからだからは想像もできないが、柔剣道合わせて7段。数々の武勲もあげているらしい。

「でも、これも、常盤さんの家に着くまでの辛抱だ」

「あそこは大きいエアコンがあつて涼しいからな」

「？」

江戸川は、不思議そうな顔をした。

そうこうしているうちに、坂道を下り終えて、会話が途切れた頃二人は常盤邸に着いた。

シーン3 エアコンは科学の勝利 〱石橋本町の常盤三四郎邸〱

常盤邸は、北に向かってまっすぐのびた路地の突き当たりにあつた。

南側に銅葺きの立派な門。四方を、石を積んだ壁に囲まれた、23区内にしてはかなり広い敷地に建っていた。

西南の角に桜の木、東南の角には、樺の太木が、在った

平屋建ての切妻の屋根。東西に細長い建物の、南側の真ん中に玄関があつた。

北西の角に、通用門。建物の北側には、勝手口があり、エアコンの室外機が集められていた。

建物の西南側には、サンルームが付随していた。

二人は、邸内に入っていった。

建物の中は、外の暑さが嘘のように涼しい。

「又、おじゃまします、常盤さん。こちらは江戸川君です」

「どうも…」

「初めまして、江戸川さん。私は、常盤一郎と申します」

江戸川と一郎は、挨拶を交わした。

「まあ、立ち話も何ですし、どうぞこちらへ」

玄関ホール、リビング、ダイニング、そして、キッチンの間には境界がない。

床に段差をつくらない意匠が見て取れる。

リビングは、南西の角にあり、この建物の四分の一ほどもある広さだ。

南側のサンルームに出れば庭の桜がよく見えるだろうと思われた。

家主の趣味なのか家具、調度品は、ブラウンに統一され、落ちついた雰囲気醸し出している。

警官らが何やら調査をしている。

大山は、出されたおしぼりで顔を拭きながら

「ああ、暑かった。エアコンは、科学の勝利ですなあ」

「和光さん、すいませんが、お茶をお願いします」

一郎は家政婦の和光に茶菓子を頼むと、
大山に向き直り、

「刑事さんは、さつきいらしたときも、そうおっしゃてましたね」

大山は頭をかいた。

「いや、お恥ずかしい。暑がりなもので」

「このエアコンは、私に取り付けたんですよ」

一郎が指さしたエアコンは正方形でリビングの天井に埋め込まれていて、業務用かと思うほどに大きい。

「すると、ご職業は」

「ええ、エアコンの取付工事をやっています」

「こんなに大きいと電気代が、かかるでしょう？」

「いえ、2000Vの機械ですから、それほどでもないと思いますよ。電流が、1000Vの同じ機械の、半分で済むんです」

「電気料金の計算の仕方までは解らないんで確かなことは、言えないんですけど」

「いい親孝行が出来ましたな。あ、すいません、とんだ失礼を」

「いいんですよ。父は、医者にも「30まで持てばいい」と、言われていたらしいんですから」

「手術した当時の平均年齢は五十歳ほどだったって言うんですから、65になるまで生きて父も本望でしょう」

「はあ、そうですか。で、これからどうなさるおつもりですか？」

「遺書がないんで…分けられる物は、姉と妹と私とで三等分して、この家は私が…」

「ここに引越すかどうかは、まだ決めてないんです。妻と相談してから、考えます」

「はあ、そうですか」

大山は頷きながら言ったが、何か納得がいかないようだ。

「（姉と妹と三等分？、妹はともかく姉は嫁に行ってるんじゃないのか？、珍しいな。）」

和光が、お茶を入れてきた。

「ありがとう、和光さん。色々あつて疲れたでしょう？」

「今日は、もう結構です、帰って休んでください。又、明日よろしくお願いします。後は、僕がやっておくから」

和光が、帰っていった。

一郎は、和光が出ていった扉の方を見ながら言った。

「和光さんは、よく気の付く人で、父によく、つくしてくれたんですよ」

「でも、和光さんには気の毒だけど、辞めてもらうしかないかな、と思っています。私の家庭には、家政婦は必要ないので」

シーン2 大山刑事来訪／シーン3 エアコンは科学の勝利（後書き）

連載するときの2話目以降の投稿方法がきになったので、
ちよつと夜更かしして投稿しました。明日も仕事だから、もう寝な
いと。

シーン4

探偵の行くところ殺人有りシーン6・8

乾燥重量149kg

このお話はフィクションです、実在の人物団体等とは一切関係ありません。一応推理小説です。後半格闘シーンがありますし、人死にが出ます。ご注意ください。この話で描写されている内容を模倣しないでください。電気関係の法律に違反する可能性があります。分電盤をアスキーテキストで表現した部分があります。携帯をお使いで見えづらい方はPCサイトビューア等を使ってみてください。

シーン 4

探偵の行くところ殺人有り〜シーン 6・8 乾燥重量 149 kg

シーン 4・0

探偵の行くところ殺人有り　〜石橋本町の常盤邸〜

江戸川は、今まで数々の調度品に目を奪われていて、会話に参加していなかったのだが、唐突に一郎に尋ねた。

「書斎に入ってもよろしいですか？」

「ええ、どうぞ、一緒にします」

江戸川は、一郎に案内されて、リビングの北側の書斎の中に入った。

被害者の三四郎は、酸素濃縮装置の管を着けて歩いていたので建物にはドアがなく、部屋の境にあるのは、すべて引き戸だ。

書斎は建物の北西の角にあり、四方の壁は、机、パソコンデスク、入り口の引き戸、西側の小さな窓を除いて、残りの全てを、本棚に占領されていた。

「凄い本ですね」

「仕事の関係上、しょうがない部分も有ったんですよ」

江戸川はパソコンに歩み寄った

「ああ、壊れてしまってますね」

大山は、鑑識課員を呼び、尋ねた。

「なにか、解ったか？」

「壊れていた物は、書斎のパソコン、台所の冷蔵庫、そして、酸素濃縮装置です」

「以上の物すべてに、アース線、もしくはアンテナ線が、接続されています」

「やはり雷だろうな、よし、調査を続ける」

「大山さん、大山さん」

江戸川は部屋の隅に大山を手招きして、小声で話しかけた。

「大山さん、おかしいと思いませんか？」

「何が？」

「何故壊れている物と、壊れていない物とが有るんですか？」

「偶然だろ？、江戸川君は何でも殺人事件にするからなあ」

江戸川は大山に返事をしなかった。そのまま一郎に向き直り。

「すみません、お電話をお借りしても宜しいですか？」

書斎のコードレス電話を手に取り、事務所に電話する。

「…………絵美ちゃん？、英吉君はいるかい？」

「ああ、そうか。携帯に連絡してこっちに来るように伝えてくれな

いか？」

「そう、石橋本町の。うん、知らなかったら住所教えてあげて」

「彼、地図持っている筈だから」

「あと、5時になったら事務所閉めて、君もこっちに来てくれ、それじゃ」

「江戸川君……」

大山と、一郎が、目を見開いて江戸川を見た。

シーン4・3 午後の紅茶 〱江戸川探偵事務所〱

絵美は、江戸川からの電話を切ると、英吉の携帯の留守電にメッセージを入れた。

ビーという名の黄色いオウムは、上機嫌で何やら、さえずっている。

絵美は、のびを一つすると、

「ひと休みするかー」

ポットを手にとり紅茶を見やる。

事務所の主の嗜好を物語るように紅茶の種類は豊富だ。

「オーソドックスにダージリンにしようかな……でも、オレンジペコモすて難しいし」

と、突然芝居掛った口調になり、

「ダージリンにするべきか、オレンジペコにするべきか、それが問

題だ」

「エエカゲンニシナサイ！」

「あんたとはやってられんわーって、ビーちゃん！！」

「ハイ！」

「ビーちゃん、私のこと好き？」

「スキ！」

「ありがとう！、私もビーちゃん大好きよ」

「…ビーちゃんになら、言えるのにな…」

電話が鳴った。

「はい、江戸川探偵事務所でございます」

「あ、護国寺君。あのね、石橋本町の常盤宅に行ってほしいの」
「先生と、大山さんが居るはずだから」

絵美は、常盤邸の住所を教えた。

「さあて、仕事、仕事」

シーン 4・6 衝突？ 〳石橋本町の常盤邸〵

「江戸川君、どうして…」

大山が戸惑いながら尋ねた。

江戸川は、一郎に電話の礼を言ってから、大山の問いに答えた。

「冷蔵庫も、パソコンも、エアコンもアース工事がしてありますよね」

「それなのに、冷蔵庫とパソコンが壊れていて、エアコンが無事って言うのは、矛盾しているんです」

「しかし」

江戸川の口調が、できの悪い生徒を諭すような、それでいて半ばからかうような調子に変わった。

「原因を雷と決めつけて捜査するのは、危険ですよ」

「あらゆる可能性を考えないと」

「また、早とちりが元で失敗しても知りませんよ？」

大山は、少なからず、気分を害したようだ。

シーン4・8 英吉移動中 〱常盤邸付近〱

英吉の移動手段は、主に自転車である。通勤用兼、尾行用の自前のマウンテンバイクだ。

自動車の免許と、自動二輪の免許を持っているのだが、滅多に運転はしない。生来の乱視に加え、近頃は近視の度もすすみ、標識がよく見えないのだ。

英吉曰く。

「交差点の向こう側の信号の下についている標識が、交差点に入
て、交差点の半ばまで行かないと読めないんです」

「え？、免許の書き換えの時の視力検査ですか？、目を細めてごま
かしているんです」

「だからたまに運転なんかしちゃうと、よくても違反、悪くすると
事故を起こすんですよ」

かくして彼は、今日も元気に自転車のペダルを踏んでいるのだ。

シーン 5・0 B U F F E R 〱 常盤邸、書斎 〱

英吉が入ってきた

「失礼します」

「どうもすみません、おまたせしまして…」

江戸川は、英吉の話を遮った。

「英吉君、この家の電気関係」

「壊れた物、壊れていない物、あと、回路分けなんかも調べてみて
くれ」

「はい」

「あ、初めまして、僕は、護国寺英吉と申します」

英吉は、一郎に挨拶した。

「江戸川探偵事務所の調査員です」

「英吉君!？」

江戸川が顔をしかめたのを見て、英吉は身を縮めた。

「挨拶は大事ですからね」

「では、早速」

振り向き一郎に向かって小声で

「すみません、うちの先生あいう人だから」

英吉は、足早に書斎を出ていった。

シーン 5・3 J u s t 5 o' c l o c k 江戸川探偵
事務所へ

絵美が、ドアを閉めようとしてる。

「ごめんね、ビーちゃん。ビーちゃんは連れていけないの、そんなに、鳴かないで」

シーン 5・6 壊れている物、壊れてない物 常盤邸、書斎へ

英吉が、息を切らして帰ってきた。

「先生、よそは、一通り調べてきました、後はここだけです」
「えーと、あれ？」

「ん？、どうした？」

「テレビもミニコンポも無事なんですよ、へんだなあ」

「テレビには、アンテナ線。ミニコンポには、アース線も、FMのアンテナもつながっているのに」

「アンテナは何処にあった？」

「屋根の上です。一本のポールに上から、FM、UHF、VHF、BSの順に。FMだけ別の電線で、このミニコンポまで」

「アース工事は何にしてあったんだ？」

「えーと、パソコン、ミニコンポ、電子レンジ、冷蔵庫、洗濯機、乾燥機、シャワートイレ、それからエアコンが4台とも全部。それと酸素濃縮装置の本体」

「こんなにきっちりアース工事してある家って珍しいですよ」

「うん、で、何が壊れていた？」

「廊下の常夜灯、これは、暗くなると勝手に灯る奴です。それと、主寝室の常夜灯、これは照明器具の中のナツメ球です」

「それから台所の冷蔵庫、パソコン、最後に酸素濃縮装置です」

「あと、壊れてはいなかったんですが、ビデオデッキの時計がパーになっていました」

「雷って落ちると怖いんですね」

「なるほどね、絵美ちゃんが来たら、分電盤の写真を撮ついてもらおう」

常盤邸

フラッシュの眩い光芒が洗面所の中を照らし、絵美が、分電盤の

洗面所は、建物の北側、東西のほぼ真ん中にあり、西にキッチン、書斎。東側には、浴室、トイレ、北東の角に納戸があつた。洗面所の、廊下を挟んだ向かい側には、客間の和室があり、そのとなり、

— — — — —

ブレイカー番号 1：玄関廊下

ブレーカー番号 2 : リビング

ブレーカー番号 3：主寝室

ブレーカー番号 4：電子レンジ

ブレーカー番号 5 : 客間エアコン

ブレーカー番号 6：主寝室エアコン

ブレイカー番号 7 : 酸素濃縮装置

ブレーカー番号 8 : トイレコンセント

ブレーカー番号 9 : 客間

ブレイカー番号 10:書斎

ブレーカー番号 11:台所

ブレイカー番号 12:洗濯機乾燥機

ブレイカー番号 13:書斎エアコン

ブレーカー番号 14:リビングエアコン200V

ブレイカー番号 15: パソコン

ブレーカー番号 16:予備

- - - - -

絵美は振り向いて、尋ねた

「これで何が解るんですか？」

「壊れた物がどの回路にあるかなと、思っただけ。これが何の役に立つてくるかは、この後も調べてみないとね」

「はい、先生」

江戸川は、大山を伴って庭に出た。

「大山さん、死亡推定時刻を調べてもらってください、多分、夕立がやんだ後、夜になってからだと思います。それから、電気のメーターと、その回り、特に地面を調べてください。夕立の後ですからね、足跡が残っているかもしれない。それから最後に、常盤さんの人間関係」

大山は江戸川の依頼をメモして尋ねた。

「江戸川君、その、どうということなのかね？」

「雷鳴の後に、酸素濃縮装置に高電圧をかけて、壊すことが出来たなら、疑われることなく、事故死と思わせることが出来るでしょう？」

「そうかもしれませんが、そんなことが出来るのかね？」

江戸川は大山の問いには、直接答えず。

「第一発見者は、和光さんですよ。話を聞いてみて、いいですか？」

「構わんが、和光さんならもう帰ったぞ？」

「あつそうか、帰らせちゃってたんだ、しょうがないなあ。直接話を聞くのは、明日ですね」

「で、どんな状況だったんですか？」

「和光さんの話によると、いつもどおり、朝食をつくるために朝8時に常盤宅に来たらしい。ところがインターホンにも出ないし、ノックをしても返事がない」

「それで、まだ寝ているのだろうと思って、合鍵を使って勝手口から家の中に入ったんだそう。そして、寝間着と部屋着兼用のジャージ姿で、廊下に倒れている三四郎さんを発見したんだそう。あわててリビングの電話で、救急車を呼んだらしいが、そのときにはもう……」

「今日エアコンをつけたのは誰なんですか？それともエアコンはつきっぱなしだったんですか？」

「あ、すまん、訊かなかった。てつきり雷のせいだと、思っていたから」

江戸川は、肩を竦めてため息をつく。

「後は、明日直接あつて聞くことにします。それじゃ、先ほど頼んだことよろしく願いします。絵美ちゃん、英吉くん、引き上げよう」

三人は常盤邸を後に歩き出した。夏の高い太陽も、すっかり傾いていた。

「二人とも今日は、直帰でいいよ。タイムカードは、僕が押しておくから」

英吉は通勤用兼、尾行用のマウンテンバイクで走り去ったが、絵美は江戸川の後ろについて歩き出した。身長之差が30cmぐらいあるので、歩幅がまるで違うのだが、1m位の間隔を保ってついていく。江戸川は、それに気付くと、

「えーと。え、絵美ちゃん、駅まで送るよ、暗くなってきたし、同じ方向なものな」

絵美は、微笑んで首を縦に振った。

シーン6・8 乾燥重量149kg 江戸川探偵事務所裏の駐輪場

真夜中、事務所で調べ物を終えた江戸川が、愛車の前にたたずんでいる。OHC、空冷の単気筒。なのにキャブレターが二つ、バルブが四つの変わり種。大型免許がないと乗れないバイクなのだが、持ち主に似合った、スリムなバイクだ。マフラーは、アメリカ製の物に取り替えてあって、英吉の表現を借りると、

「ドパパパパ、パパンパン、ババババ」

という音がする。普段は、近所から白い目で見られていても全然気

にしない江戸川なのだが、さすがにこの時間に騒音をたてるわけにはいかず、川越街道までは押していこうとは思っただけだ…

「排気量の割には、軽いバイクと言ってもなあ」

早い話が途方に暮れているのである。

シーン4

探偵の行くところ殺人有り

シーン6・8

乾燥重量149kg

「アイス」物は現在鋭意作成中です。すいません。人気ないのがわかってるんですが、こちらは完成済みのものを分割して修正してupするだけなので楽なんです。

時代にあわせて「ポケベル」関係を「携帯」関係に修正。

シーン7 雷のせいじゃない！？／シーン8 午後の お紅茶（前書き）

このお話はフィクションです、実在の人物団体等とは一切関係ありません。一応推理小説です。後半格闘シーンがありますし、人死にが出ます。ご注意ください。この話で描写されている内容を模倣しないでください。電気関係の法律に違反する可能性があります。分電盤をアスキーテキストで表現した部分があります。携帯をお使いで見えづらい方はPCサイトビューア等を使ってみてください。

シーン7 雷のせいじゃない!? / シーン8 午後のお紅茶

シーン7 雷のせいじゃない!? 〃常盤邸、二日目、庭 8
月27日(水)

「大山さん、頼んでおいたことはやっておいてくれましたか?」

「ああ、ちゃんと調べておいたよ、ところで、護国寺君たちは?」

「ちょっと調べ物を頼んでいましてね、終わり次第合流しますよ」

大山は、少し落胆したようだったが、こぼれる汗を、拭き、拭き、話し出した。

「死亡推定時刻は、君の予測通りで、夕方じゃあなかった。夜中の一時ごろだそうだ。それから、電気のメーターだが、建物の北面の壁、ちょうど洗面所の裏にあつたんだが、ネジに真新しい傷があつたよ。誰かが細工したのは間違いないようだな。だけど、指紋は無かった。えーと、それから、メーターの下の地面には、推定サイズ28cmの靴跡があつたよ。三四郎さんを殺したのは、一郎かな?」

江戸川は、ため息を付いた。せっかちな大山にあきれたように

「大山さん、まだ結論を出すのは、早いですよ。まだ、みなさんに事情も聞いていないのに。今日は、どなたが来ているんですか?」

「三四郎さんの一男二女、それから和光さんだよ」

「三四郎さんの奥さんは、もう亡くなっているんですね?」

「ああ、十年も前にな、特に、不審な点はないようだが」

江戸川は、大山とともに家の中に入っただけ

「やあ、ここはいつ来ても、本当に涼しいですなあ」

リビングの中には警察の人間数名と、和光、長女の恵美子、次女の由美子、そして一郎がいる。

大山が、話を切りだした。

「今日こうしてご足労を願ったのはですな。あなた方のお父上の三四郎氏の死因に不審な点が認められるからなのであります。三四郎氏の推定死亡時刻はだいたい深夜一時」

ここで、江戸川が口を挟んだ、

「酸素濃縮装置が壊れて、苦しくなった常盤さんは助けを求めようと寝室からでて電話のあるリビング、または書斎に行こうとして、廊下で力尽きたんです」

大山が話を続ける

「つまりですな、その時刻には、もう雷雲が存在していなかった。だから、三四郎氏が死んだのは雷のせいではあり得ないのです」

「じゃあ、何のせいだっけ言うのよ!？」

いらだった声を上げたのは次女の由美子だ

大山は、顔色一つ変えずに話を続ける。

「原因は調査中です。えー、これはきわめて形式的な質問なんですが。その時刻にみなさんが何をなさっていたのか、お聞かせ願えますか？」

「アリバイって訳ですか？」

一番に答えたのは一郎だ。中肉中背、日焼けした顔に、大きな目と丸い鼻、実直さを絵に描いて貼ったような顔をしている。

「僕は、会社の同僚と飲みに行きまして、そのあとカラオケボックスに行きました。0時半頃に入って、2時位までそこに居ました。名前は確か、ファソラシクラブ。調べていただければ解ると思います。でもね、大山さん、父が夜中に死んだなら、なんでベッドに寝ていた跡が残っていなかったんですか？」

大山も、江戸川もその問いには答えなかった。

次に口を開いたのは長女の恵美子だ。肩の辺りまでのセミロングヘア、主婦らしく落ちついた雰囲気がある。

「あたしは、仕事帰りの主人と合流して食事に行つて…。一時頃は、知り合いのスナックで飲んでいたわ。マスターの他にも、結構お客さんが入っていて人が居たから…。あたしがそこに居たことを覚えていてくれる人もいると思うけど」

続いて、次女の由美子である。腰の辺りまであるロングヘアにブリーチをかけているらしい茶色っぽい髪が、はっきりした顔立ちによく似合っていた。

「あたしは、ずうつとアパートの自分の部屋にいました。0時頃に寝て、朝まで起きませんでした」

最後は家政婦の和光である

「私は、こちらを出た後夕食の買い物をして、家に帰りました。そのまま朝まで、家にいましたが、主人を亡くした後、ずっと独りなので証明してくれる人は居ません」

大山が礼を言った。

「はい、解りました、ありがとうございました。江戸川君、君からは？」

江戸川は、和光の方を向くと。

「そうですね、では、和光さん。あなたが、昨日常盤さんの家でしたことを、憶えていることだけでいいですから、全部教えてください」

和光は、話し出した。

「裏門から中に入って、勝手口のインターホンを鳴らしたんですが、インターホンにだれも出ないので、合鍵で中に入りました。旦那様が廊下で倒れているのを見つけ、リビングの電話で救急車を呼びました。一郎さんにも電話しました。一郎さんが来てくださって、旦那様には、一郎さんが、付き添っていらっしゃって。私は、いつもどおり、お掃除を始めました、何かしていないとおかしくなりそうだったんです。主寝室の掃除が、終わった頃に警察の方がみえて

…」

「掃除というと、ベッドメイキングなんかも？」

「はい」

江戸川は、重ねて尋ねた、

「他に、何か、気付いたことは、無かったですか？」

和光は、しばらく考えていたが。

「そういえば、寝室のエアコンのランプが点滅していたような」

江戸川は、頷くと

「常盤さんは眠るときに必ずエアコンを使う人だったんですか？」

「はい、暑いと寝苦しいとおっしゃっていました」

「これで、確信しました、常盤さんは、誰かに殺されたんです。これは、雷のせいなんかじゃなくて…」

江戸川の話は、ヒステリックな叫び声によって突然遮られた。

「私たちが殺したって言うの！？」

次女の由美子である、江戸川は、闘牛士が牛の突進から身をかわすように言った。

「それは、まだ解りません。だからみなさんに、ご協力を、お願いしているんです」

口調は、柔らかいが、目つきは冷ややかだ。そこへ、絵美と英吉が入ってきた。

江戸川はそれを見ると、

「では、これで失礼します、行きましょうか大山さん」

大山を誘って常盤邸を辞去した。外へ出るとさっそく英吉が報告を始めた。

「長女の恵美子は、サラ金に多額の借金があります。これは、旦那も知らないことのようにです。一郎と由美子と和光には、特に多額の借金はないようです。まあ、常識の範囲内でってことのようにですね」

「うん、絵美ちゃんの方はどうだった？」

「被害者の三四郎さんは、多額の生命保険をかけられていたようです。受取人は長女の恵美子……」

「そうかあ、恵美子が常盤さんを……」

大山が、大声で話し始めるのを、江戸川は制止して。

「大山さん、恵美子と、一郎にはアリバイがあるんですよ。それに、和光さんだつて容疑者の一人なんですよ？ 合鍵も持っていたし、救急車をよぶ前にやりたいほうだいできる立場だったんじゃないですか？ それに由美子にも、アリバイはないですしね？」

「それだ！、由美子と、和光さんが……」

大山以外の三人は、顔を見合わせてため息を付いた。

シーン8 午後のお紅茶 江戸川探偵事務所 8月28日
(木)

A L C三階建て、味もそつけない直方体の貸しビルの二階、道路に面した西側の一室、江戸川探偵事務所。ちょうど午後三時、ティー・タイムである。江戸川は、ストレートティ。絵美は、レモンティ。英吉は、ミルクティ。大山は、コーヒーが好きなのだが、無いのでしょうが無く、泣く泣く紅茶を飲んでいる。開け放した窓から隣の公園で遊ぶ子どもたちの声と、セミの鳴く声が聞こえてくる。暑がりの大山が、セミの声がうるさいから窓を閉めて、エアコンをかけようと提案したが、三対一で否決された。

「さて、少し整理してみましようか、絵美ちゃん、よろしく」

絵美が、ホワイトボードの前に陣取った。江戸川の推理の要点を板書するのだ。

「まず第一に、犯人は、常盤さんが低肺患者で、いつも酸素濃縮装置を着けていることを知っている人物です。そして、犯人になる為にはある程度の電気の知識が必要になります。そのかわり、電気の知識があれば合い鍵は必要ありません。犯行時刻は、死亡推定時刻と同じ深夜1時頃です。なぜなら、タイマーのような仕掛けをすることはまず不可能だからです」

大山がタバコを取り出しかけてやめた。ほかの三人はタバコを吸

わないので、灰皿がないからだ。大山は、少々ばつが悪そうな顔をしながら尋ねた。

「江戸川君、犯人は電気のメーターを使って何をしたんだい？」

江戸川は、大山の質問に答えて、

「電気のメーターにつながっている三本の線の真ん中の白い線を、メーターから外したんですよ。感電防止のゴム手袋は、指紋が残るのも防いでくれました。絵美ちゃん、分電盤の写真を持ってきてくれないか？」

絵美が写真を持ってきた。

「ありがとう。さて、この写真で、壊れた物のある回路に色を塗っていくと……廊下の常夜灯、主寝室の常夜灯、台所の冷蔵庫、パソコン、酸素濃縮装置」

- - - - -

ブレーカー番号 1：玄関廊下

ブレーカー番号 2：リビング

ブレーカー番号 3：主寝室

ブレーカー番号 4：電子レンジ

ブレーカー番号 5：客間エアコン

ブレーカー番号 6：主寝室エアコン

ブレーカー番号 7：酸素濃縮装置

ブレーカー番号 8：トイレコンセント

ブレーカー番号 9：客間

ブレーカー番号 10：書斎

江戸川はさらに続けた。

「実際は、もっと高い電圧がかかったかもしれませんからね。夜で、三四郎さんは寝ていて、奇数の回路で使われていた電気製品がほとんど無かったのに対して、偶数の回路には、寝室のエアコンがあって部屋を冷やしていたんですから」

絵美が、歓声を上げた。

「先生、すごい、何でもそんなこと知っているんですか？」

「 Ω の法則は中学で習ったし、それに、僕は電気工事士の資格を持っているんだ。実務経験は、無いけどね。ただ、メーターや、単相200Vの知識は電気関係の工事をしていた人しか持ってないだろうね」

大山が、訝しげに、

「でも、そううまく行くかな？」

江戸川が、補足説明をする。

「一度でうまく行かなくなっただけいいんですよ、失敗したら、事件にはなりませんからね。成功するまで、何度でも繰り返し返せるんですよ」

大山は、頷き、

「じゃあ、やっぱり一郎が？」 f

「まだ解りませんよ、通りすがりに悪戯していった奴が居たのかも」

しれませんしね。二つ、三つの電気製品が壊れるだろうとしか、考えてなかった…なんてね」

江戸川は、一人一人の顔を見わたしてから言った。

「さて、納得していただいたところで、一郎と恵美子のアリバイを、検証に行きますか」

事務所には、ビーがひとり、取り残された。

シーン7 雷のせいじゃない!?! / シーン8 午後の お紅茶(後書き)

電気メーターのまわりをいじってはいけません。
いじったら、

タイ — Φ — (— Д —) — Φ — 水

¥

¥

¥ : ¥

¥
|
|
|

$$\begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \\ , \\ \diagdown \\ \diagup \\ | \end{array} \quad \begin{array}{c} \diagdown \\ \diagup \\ \diagdown \\ \diagup \\ \diagdown \\ \diagup \\ | \end{array}$$
$$\frac{1}{\left(\begin{array}{c} / \\ / \\ > \end{array} \right)} \left(\begin{array}{c} | \\ | \\ < \end{array} \right)$$
[illegible]
$$\frac{\text{夫}}{\text{二}} \cdot \frac{\text{二}}{\text{一}} > \frac{\text{一}}{\text{一}} \left(\frac{\text{一}}{\text{一}} \right) > \frac{\text{一}}{\text{一}}$$

“
、
—
—
—
/
/
|
—
—
、
/
/
/

	t
	♀

$$\partial$$
$$\partial_6$$
$$\partial_{\theta_1}$$

逮捕されます。

決して実際に実行、実験しないでください。

(しょうもないトリックですいません)

シーン9 急展開？、何が？シーン12・9 チャリンコリンリン（前書き）

このお話はフィクションです、実在の人物団体等とは一切関係ありません。一応推理小説です。後半格闘シーンがありますし、人死にが出ます。ご注意ください。この話で描写されている内容を模倣しないでください。電気関係の法律に違反する可能性があります。

シーン9 急展開？、何が？ シーン12・9 チャリンコリンリン

シーン9 急展開？、何が？ 常盤邸近くの路上

二手に別れていた一行が合流したのは、もうかなり暗くなった午後7時過ぎだった。

江戸川が、大山に言った。

「恵美子のアリバイは、完璧ですね、店のマスターも、他の客も嘘を言っているようには、見えないし」

大山が、頷きながら

「一郎の、アリバイもだ。カラオケボックスの防犯ビデオにしっかりと一郎が写っている。クローン人間でも、身代わりに立てなきゃ、一郎に常盤さんは、殺せない」

英吉が思いだしたように言った。

「そういえば、この近くなんですよね、由美子って人のアパート。僕、ちよつと行って同じアパートの住人に聞き込みしてきます」

「あ、護国寺君、俺も行くよ。こういうときは、警察手帳が物言うんだ」

「暑い暑い、とか、コーヒーコーヒー、とか、ですか？」

「言ってる」

英吉と大山は、連れだって由美子のアパートに向かった。

絵美は何事か考え込んでいる江戸川の顔をのぞき込んで聞いた。

「先生、何考えてるんですか？。絵美ちゃんは可愛いなあ、とか？」

「うん、それもあるけどね…」

車のヘッドライトに幻惑されて、江戸川表情は読みとれない。
絵美は、自分で言っておいて、真っ赤になった

「……………（夜でよかった）」

シーン 9 / 5 大活躍？、誰が？ 〵由美子のアパートの近く〵

大男の英吉と小柄な大山の、凸凹コンビは、買い物帰りらしい由美子を見つけた。由美子は、通りの向こうからこちらへ向かって歩いてくる。まだこちらには気付いていないようだ。英吉が声を掛けようとしたが、それを大山が止めた。一人の男が、由美子の後を尾行してきているのだ。由美子が小走りになると、その男も小走りになる。由美子が走り出すと、その男も走り出した。

「痴漢だ！」

凸凹コンビが走り出した。大山が先に追いついて、後ろから抱きつき、豪快な裏投げ、そこへ、英吉がやってきて袈裟固め。

大山が審判員よろしく右手を動かして、叫んだ。

「技有り！合わせて一本！！」

小柄ながら、柔剣道合わせて7段の大山。大柄で怪力の持ち主の英吉。凸凹コンビは無敵だった。

由美子が、押さえ込まれている男の顔を見て大声を上げた。

「田辺さん？」

英吉が、尋ねた

「知ってる人なんですか？」

由美子は、驚きで目をまるくしている

「同じアパートの、隣の部屋の人なんです」

田辺と呼ばれた青年は、英吉の下でもがいた

「何をするんですか！」

大山が言い返す。

「彼女をつけ回してただろう？」

「……………」

由美子も問う。

「じゃあ今までずっと、あたしのことつけ回してたのは…」

田辺は、英吉が、まだどかないので苦しそうな顔をしながら、

「誤解ですよ。つけ回してなんかいません。彼女と僕は同じアパートなんです、ひんぱんに顔を見ても不思議じゃないでしょう？。駅から帰る道も、駅へ向かう道も、買い物へ行く場所だって同じなんですからね。理解出来たのならどいてください。僕には、あなた方にこんな理不尽な目に合わされる筋合いはないですよ」

英吉も、そう言われるとどかざるを得ない。とりあえず、おびえる由美子をアパートの由美子の部屋まで送ることにした。

田辺は、急ぎ足で先にさつさと行ってしまった。

シーン１０ ストーカー？、なのか？ ー由美子のアパートー

木造二階建て、部屋数が八部屋のアパートの二階の一室、203号室が由美子の部屋である。田辺と呼ばれた青年の部屋は、隣の205号室らしい。長方形の部屋の中に、ユニットバスと、ミニキッチン。典型的な、ワンルームである。

部屋の中に入ると、すぐ左にユニットバス、廊下と部屋との境目は無い。ミニキッチンと小さな冷蔵庫、二階なのでロフトは、割と広いようだ。

由美子はショックを隠しきれない

「田辺さんだったなんて…」

大山が、なだめる。

「まあ、まあ、君の考え過ぎじゃないのか？」

由美子はきかない。

「あたしあの人のこと、ふったから、逆恨みされているのかも」

「ストーカーって奴ですか？」

英吉がさして感銘を受けていないような表情で言った。

「そんなにしつっこそうには、見えなかったけどねえ」

大山も、眉唾もんだなっていう顔をしている。

由美子は、そんな雰囲気を感じに察知して、怒り出してしまった。

「信じてくれないならいいです！！、もう大丈夫だから帰って！」

大山と英吉は、部屋の外に追い出されてしまった。振り向くと、もう、ドアは閉まっていた。二人は、堅く閉ざされた扉を見て、顔を見合わせた。

大山は、溜息を付くと、

「機嫌を損ねてしまったらしいな」

英吉も、お手上げという表情で、言った。

「まあ、あの元気なら、大丈夫ですよ。今日のところは、引き上げましょよ」

「そうだな」

大山は、うなずいて、提案した。

「今日は、みんなで飲みに行かないか？」

「もう、二人とも帰っちゃってますよ、それに…、（折角の二人つきりを邪魔したら、絵美さんに恨まれちゃう）…」

大山が訝しげに、

「それに、なんだい？」

英吉は、知らん顔して、

「いえ、何でもありません、こっちの話っスから」

シーン10・5 月がとつても？ 〱 駅へ向かう坂道〱

江戸川が、絵美を駅まで送っていつている。折角、英吉が、氣を使ったのに、やはりというか、予想どおりというか、

全然ロマンティックな展開には、なっていない。何を話すでなくただ黙々と歩いていく。それでも絵美は、なんだか嬉しそうだ。

「…（遠回りしたいナ）…」

シーン10・7 盗聴器？　　〱江戸川探偵事務所〱

絵美を駅まで送った江戸川は、一人事務所で、今まで解ったことを、まとめようとしていた。

いや、正確には、一人と一羽…上機嫌に何やらさえずっている。

「ビーチャン、ダイスキ！、ダイスキ！、ダイスキ！、ダイスキ！」

絵美が、教えた言葉のようで、高い声でしゃべっている。

「何を教えているんだか」

江戸川は、あきれ顔でつぶやいたが、止まる気配がない。

「ビーチャン、アリガトウ、ドウイタシマシテ」

「はいはい」

「ワタシ、センセイガスキ」

江戸川は、ペンを取り落とした。

シーン11 又、次の日、午後三時　　〱江戸川探偵事務所〱
8月29日（金）

英吉は、来客用のソファにどつかと腰掛け、（ソファの悲鳴が聞こえるようだ）。肘掛椅子探偵気取りで語り出した。

「三四郎さんが死んで一番徳をするのは恵美子です。三四郎さんの遺産三分の一に加えて、多額の保険金が入る」

絵美は、紅茶を煎れながら反論した

「でも恵美子さんにはアリバイがあるのよ」

英吉は、すぐに降参してしまった。

「そうなんですよね。それから…電気のことには詳しくそうなのは、一郎さんだけ」

絵美は、いれた紅茶を渡しながら返事をした。

「やっぱりアリバイがあるのよね」

英吉は、両手で顎を支えながら。

「由美子と和光には、アリバイがないけど…電気にも詳しくなさそうだし、三四郎さんが死んで特に徳をするってわけでもないし。和光にとって見れば、失業して逆に損をすることになる」

江戸川は、会話に参加しようとはせずに、開いた窓から外の公園を眺めたままで、小声でつぶやいた。

「一つだけ、すべての命題を満たしている答えがあるんだ。だけど、そんなことが、あり得るだろうか？」

絵美も英吉も、江戸川のつぶやきに気付くことはなかった。

シーン12　その又、次の日、昼過ぎ　　江戸川探偵事務所　　
8月30日（土）

英吉は、向井原の、浮気調査に出かけ、絵美は、パソコンに向かい、江戸川は、週刊誌を読んでいた。そこへ、招いていなくてもよく来る大山が、息せききって、入ってきた。

「江戸川君！大変だ、由美子の部屋の、隣の部屋で死人が出た。すぐ一緒に、来てくれ」

大山は今日は、パトカーだ。江戸川と大山は、飛び乗るように入り込み、急発進。絵美と、ビーは、おいてきぼりだ。

絵美は、江戸川たちの出ていったドアから視線を転じて、ペットのオウムに話しかけた。

「ビーちゃん、おいていかれちゃったね…」

シーン12・3　強盗？、それとも？　　由美子のアパート、田辺の部屋　　

由美子のアパートは、東西に長い木造二階建てで、東側が道路に面している。由美子の部屋は、二階の手前から三番目（奥から二番目）203号室である。

手前（東）から201号、202号と続くのだが、204号室は無く、203の次はいきなり、205号室である。

アパートは、完全な、シンメトリーで、201・202と203・205とが対称で、201と202、203と205が、それぞれ対称である。201と202、203と205のドアは、近く。202と203のドアの間は、離れている。アパートの西側には、小川が流れていて、せせらぎの音が聞こえてくる。

階段を上がりながら、江戸川が、大山に尋ねた。

「隣って言いましたよね、202ですか？」

「いいや、205号室だ」

「じゃあ、大山さんに痴漢に間違われた……」

「……（つまらんことを知っているな）……まあ、そうだ。右脇腹を刺されている、直接の死因は失血死ってところだろう、部屋も荒らされているから、強盗じゃないかな？。第一発見者は、自称、ただの友人の、北野妙子。って言っても、部屋へは、合鍵で入ったって言うんだから、知れるけどな。部屋の中の物は、まだ、何一つ動かししていない。北野も、何もさわっていないそうだ」

ドアを開けて、中に入ると、由美子の部屋とは逆に、すぐ右にユニットバス。フロアリングの廊下と四畳半ほどの部屋との間に境はない。部屋の南側には、テラス窓（昔風の言い方をするなら掃き出し窓）があり。窓の向こうはベランダになっていて、エアコンの室外機と洗濯機が見える。部屋の北側には、ミニキッチンと冷蔵庫があった。

ミニキッチンには料理道具と呼べるような物は何もなく、部屋の主が料理に使ったことがないのは明らかだ。部屋の南東側の角には

テレビを乗せたテレビボードが置いてある。部屋の西側の窓から小川と、対岸の川沿いの道路が見える。

南西側の角には、ガラス扉の付いた本棚があった。

部屋の中は、まるで竜巻に襲われたような有り様だった。

部屋中にガラスの破片が散乱し、本やCD、そしてナイフが床中に散らばっている。死者は、おそらくは生前ナイフのコレクターだったのだろう。アーミーナイフ、ジャンビア、バタフライナイフ、グールナイフまである。田辺は、部屋の真ん中に斜めにおいてあるソファベッドに、まるで向き合っているテレビを見ているように座っていた。白いTシャツの右脇腹が血に染まっている。腕時計を左手にしているところを見ると右利きなのだろうか。部屋の明かりは点いたままで、エアコンがうなっていた。

江戸川は、腕時計をずらしてみた。そこには、くつきり白く、日焼けしていない部分があった。振り向き、大山に尋ねる。

「凶器は何ですか？」

大山は、血に染まったアーミーナイフをハンカチ越しに手にとって見せた。

「多分こいつだろう」

「指紋は？」

「今調べているところなんだが、多分強盗だよ。だから出ないんじゃないかな。窓が割られているんだ。犯人は、ベランダから入り、田辺を殺して、部屋の中を荒らし、又、ベランダから出ていったんだ」

「…（又、この人は）…」

シーン１２・５ ナオミヨ？ 江戸川探偵事務所へ

午後三時、お茶の時間だ。絵美が、シェークスピア劇のまねをしようとしていると、階段を上がってくる音が聞こえて、事務所のドアが開けられた。

絵美は、一瞥すると嫌そうな顔をした。

「また、あんたか」

そこには、身長１７５ｃｍは、あろうかという、背の高い女の子が立っていた。

「お姉ちゃん、お客さんに、そんな応対していいの？」

「あんたは、お客じゃないもの」

彼女の名は、直美と言って、絵美の妹である。近所にある石橋高校の三年生。私服の高校なので、今日びの女子高生の流行とはあまり関係のない格好をしている。モデルと見紛うばかりの長身を、スリムのジーンズと、白いＴシャツで包み、背中の中程まで伸びた髪を無造作に結んでいる。鳥にたとえるなら燕だろうか。

「まあまあ、そう言わずに。折角来たんだから、お茶でも入れてよ」

絵美はまだ納得していない。

「だいたい、何であんたが、こっちに来んのよ？、地下鉄使ってる
くせに。地下鉄の駅とは、正反対の方角じゃない」

絵美は、文句を言いながらもお茶を入れてやった。直美は、レモン
ティーを受け取りながら、返事をした。

「いいじゃない。ここって、あたしよりも背の高い人が居る、貴重
な場所なんだから」

絵美の顔色が変わった。

「あんた、まさか」

直美は、笑い出した。

「じょーだんよ。近くの友達の家までゲーム借りに来たから、つい
でおいしいお茶を飲ませてもらおうと思って」

言った後、一転してまじめな顔になると。

「だけどね、お姉ちゃん、そろそろ諦めたら？、全然脈が無いんで
しょう？」

「全然無いつてことは、無いわよ……多分」

反論する声にも力が入らない。

「まあ、お姉ちゃんの人生だもんね……じゃあ、あたし帰るね。お
茶ごちそうさま」

雲行きが怪しくなってきたのを敏感に察知して、直美は帰っていた。妹が出ていったドアを見つめながら、絵美がつぶやいた。

「全然脈が無いってことは、無いわよ…」

「ソウ、ソウ」

慰めたのは、黄色いオウムである。

「ありがと、ビーちゃん」

絵美は、やっと笑った。気を取り直して、英吉の携帯に電話した。

「あ、もしもし護国寺君？そっちが一段落したら由美子さんのアパートに行ってくれる？」

これで、向井原が一段落したら、合流するはずだ。

シーン12・7 まだ結論を出すのは、早いですってば。　　～由美子のアパート、田辺の部屋～

江戸川は、割られているベランダの窓を見に行った。部屋中に飛び散っているガラスのかげらは、この窓の物のようだ。ガラスのかげらは、ベランダの外にはほとんど飛び散っておらず、ベランダ側から割ったことは、間違いないようだ。振り向いて、大山に言う。

「窓の外からガラスを割ったからってベランダから入ったとは、限

らないですよ。玄関から入ったって、一度ベランダに出さえすれば、窓の外からガラスを割れますから」

部屋の東側の壁には、コルクのボードが取り付けられており、ナイフを置いていたと思われるピンが全部で10対刺さっていた。

「ナイフの数が、凶器と思われる物も合わせて10本で、ピンの数が同じく10対……。だから、これは強盗じゃありませんよ」

大山は、納得出来ないようだ。

「……（部屋が荒らされていて、殺しだって言うのに、何故強盗じゃないなんて思うんだ？）……」

シーン12・9 チャリンコリンリン 向井原駅付近

一方そのころ英吉は、自前のマウンテンバイクで、由美子のアパートめざして走っていた。もう6年も使い込まれた、少々くたびれた感のある自転車なのだが、よく手入れされていて、すこぶる調子はいい。この自転車が、英吉の足をこんなに太くしたのだ。金属疲労で折れたペダルを換え、その後も折れた後輪の車軸を交換している。吹っ飛んだスポークを取り替えた本数に到っては、数え切れないほどだ。

だらだらと続く坂道を何やらつぶやきながら登っていく。いったんこの坂を越えてしまえば、あとは、下り坂なので楽が出来るのだ。

「なんだ坂、こんな坂、なんだ坂、こんな坂」

傍目には、ちよつと不気味である。

シーン9 急展開？、何が？シーン12・9 チャリンコリンリン（後書き）

絵美の妹の直美ちゃん登場です。

「ナオミヨ？」は執筆当時放映されていた某エステティックサロンのCMの

ナオミ・キャンベルのセリフからとったものです。

直美ちゃんは最後のほうで再登場します。

2008/06/14 修正

”ポケベル”が残っていたので、携帯に修正して、文脈の前後を整えました。

なにせ、10年前に書いたものですから。

シーン13 緩衝材の到着が待たれる……シーン15 下手人は……（前書き）

このお話はフィクションです、実在の人物団体等とは一切関係ありません。一応推理小説です。後半格闘シーンがありますし、人死にが出ます。ご注意ください。この話で描写されている内容を模倣しないでください。電気関係の法律に違反する可能性があります。

シーン13 緩衝材の到着が待たれる……シーン15 下手人は……

シーン13 緩衝材の到着が待たれる…… 〵由美子のアパート、田
辺の部屋〵

捜査員の一人が報告に来た。

「田辺の昨日の足どりなんです。午前10時から、午後6時まで
は、バイト先のレンタルビデオ店にいたようです。バイト先を出て
からの足どりについては、目下、目撃者を捜しております」

ついたままの電灯を見ながら、江戸川がつぶやいた。

「午後7時までの生存は、確認されている。殺されたのは、暗くな
ってからか」

大山は、江戸川に疑問をぶつけた。

「何で強盗じゃないなんて思っただ？」

江戸川の返答は、こうだ。

「強盗しに来て、現場で武器を調達するはず無いじゃないですか。
強盗する意志があったのなら、凶器は用意してくるでしょう」

大山はしつこい。

「空き巣しに来て、田辺と出くわして、衝動的に犯行に及んだとは、考えられないか？」

江戸川は、そっぽ向いている。

だが、大山は重ねて、

「空き巣が、居直り強盗になったんだよ」

江戸川は、振り向きもせずと言った。

「夜に仕事する空き巣なんて、居るんですか？、明かりだつて点いてたのに。それに、ガラスが割られてから乱闘になったのなら、当然田辺の体には、ガラスのかけらによる外傷が残されているはずですよ？、でも、そんな傷、ないですよ」

江戸川は、言うだけ言ってしまうと、携帯電話を取り出し、事務所に電話した。絵美を現場に呼びだして電話を切り、心の中でつぶやいた。

「（大山さんと二人つきりじゃ、ストレスがたまる。それにしても何故ここまで部屋を荒らす必要があったんだ？、いったい何を探していたんだろう。捜し物は見つかったのだろうか？）」

シーン 13・3 呼ばれて飛び出て？ 江戸川探偵事務所

電話を受けた絵美は、張り切っていた。

「先生のお召しだわ、急いで行かなくっちゃ。そうよ！、私は必要

とされているんだから！。全然脈が無いなんてこと、無いんだから
！！」

シーン１３・５ 英吉合流 〱由美子のアパート〱

マウンテンバイクに黒いリュック、それから突き出した図面用の
ケース。護国寺英吉の登場である。が、たちまち駆けつけて来た三
人の警官に囲まれてしまう。

それでも英吉少しもあわてず、名刺を取り出して、

「あ、おはようございます、私、こういうものです。大山さんは、
いらっしやいますか？」

伝令が、大山の元へ走り、英吉は、やっと通してもらえた。江戸
川に再会した英吉が、ことの顛末を話すと、江戸川は、

「（やれやれ、やっと大山さんと二人っきりの状態から解放される
…）」

と、思いながらも、

「この時期そんなカッコでうろついているからだよ」

と、冷たく言った。

大山が、捜査状況を知らせに来た。

「財布らしい物も、現金も見つからない。これは、やはり、物取り
の仕業だろう」

英吉は、それを聞いて不思議そうな、顔をした。

「田辺は、そりゃあ、たいしたガタイじゃなかったですけど、どうせ、強盗するんなら隣の部屋の、か弱い女の子を、ねらうもんじゃないですかねえ」

大山は、顔をしかめた。

「…（こいつ、いつか、犯罪を、犯すかもしれんな。）…」

雑然とした現場の中で江戸川の注意を引いたものがある。メールボックスと呼ばれるものだ。昔風の呼び方をすれば集合ポスト、ダイヤル式の鍵の付いた、なかなかしつかりした物だ。一階の廊下の道路よりの壁に取り付けられている。

「（鍵が付いているのか？、小さい物なら隠しておけそうだな）」

江戸川は、英吉をメールボックスの前に呼んで、205号室のポストを指さして言った。

「英吉君、こいつを開けてくれないか？壊さずに、だよ」

江戸川は、しっかり釘を刺した。

シーン13・7 大迷惑？ 〽由美子のアパート〽

絵美が、張り切ってタクシーで乗り付けると、そこは、絵美が想

像していたのとは、少し状況違った。普段、見慣れたマウンテンバイクがおいてあったのだ。

「大山さんはともかく、もう、護国寺君まで来てたのか…」

絵美は、少し落胆したようだったが、すぐに気を取り直して、現場の中に入っていた。アパートの一階の道路よりにあるメールボックス（集合ポスト）の、前まで来ると、英吉が、205号室のメールボックスをあげようとダイヤルを順番に変えていていた。

「3、3、違う。3、4、これも違う。3…、5…」

そこに大山もやってきた。大山は、しばらく後ろで見ていたが、短気を起こした。

「護国寺くん！、そこをどけ！！」

気合い一閃。見事なまでの後ろ回し蹴りが、アパートのメールボックスに炸裂した。

「どうだ、一発で開いただろう」

得意げに言う大山に、絵美はあきれたようだ。

「開けたんじゃないかって、壊したんでしょ。修理代、警察で出してくださいね？。怪力自慢の護国寺君が、なんで、ダイヤルをいじっていたと思うんです？」

大山はしかられた子犬みたいになったが、ともあれ岩戸はこじ開けられた。開いた扉の中からは、一枚のポラロイド写真が出てきた。

夜に撮った物らしく、露光不足で、はっきりと解らないが、どうやら、常盤邸の写真のようだ。常盤邸の壁を背景に、髪の毛の長さが腰ぐらいまである一人の人物の後ろ姿が写されていた。

シーン14 由美子帰宅 〱 由美子のアパート 〱

アパートの住人の尋問が一通り済んだ頃、由美子が帰ってきたと、大山の部下が伝えに来た。時刻は、もう午後6時を回っているのだが、夏の日は長く、まだ暗くならない。由美子は、アパートの回りをとり囲んでいる警官たちに驚いたようだ。

「何があつたんですか？」

英吉が説明した、

「ちょっと殺人が」

由美子は、少し飛び上がったように見えた。

「殺人って、人殺し？、誰が、誰に？」

英吉は、一通り説明してやった。由美子が落ちついたところで、大山が由美子に尋ねた。

「昨日の晩、何か不審な物音を聞かなかったですか？」

由美子は、首を振った

「いいえ、特に何も。」

大山は、質問を変えた。

「由美子さんが昨日、自分の部屋に帰ってきたのは、今ぐらいの間ですか？」

由美子は、昨日のことを回想した。

「いいえ、昨日は、会社で残業をしていたので、九時過ぎだったと思います」

江戸川も質問する、

「九時に帰っていらしてからはずっとこの部屋にいらしたんですか？、コンビニとかにも行かずに？」

由美子は、頷いた。

「ええ、何処にも出かけず部屋にいました。」

大山は、あごに手をやりながら、

「となると、犯行が行われたのは、由美子さんが、帰宅する前、九時以前ということになるのか」

江戸川は、腕を組みながら

「その可能性もありますね、でも……」

「あー、はいはい、解りましたよ、まだ結論を出すのは、早いってんでしょ」

江戸川は、頷いて言った。

「とりあえず、今日は、引き上げます、何か新事実が解ったら知らせてください。帰ろうか、絵美ちゃん、英吉君」

帰ろうとする絵美に大山が、声を掛けた。

「あ、大塚君、パトカーでよかつたらだけど…駅まで送ってあげよ」

江戸川は、大山の方に向き直って言った。

「その必要はないですよ。絵美ちゃんは、私がちゃんと送りますから」

絵美、感動のあまりなにも言えない。

英吉は、驚きを表情にこそあらわさなかったが、内心では、

「（おおーっと、ライバル宣言って、やつツスかー？）」

と、思っていた。

三人は、石化した大山を残し由美子のアパートを後にした。英吉はマウンテンバイクで走り去り、江戸川と絵美は、二人きりになった。

江戸川は、片手を、胸にあてて、うやうやしく一礼した。

「さあ、参りましょうか、お姫さま」

シーン14・7 お節介? 〱由美子のアパート近くの路上〱

英吉は、マウンテンバイクを止めて夜空を見上げていた。町の灯りの上には、夏の大三角形。琴座のベガと鷲座のアルタイル、そして白鳥座のデネブ。

英吉は、白鳥座を相合い傘に見立てて、そつと彼らの名前を書いてやった。

そして、はたと気付いた。

「あ、ベガとアルタイルと言ったら……。織り姫と彦星みたいに年に一回しか逢えないなんてことになったりして?」

シーン15 下手人は…… 〱由美子のアパート、田辺の部屋〱

8月31日(日)

翌日の午後、江戸川探偵事務所ご一行様は、大山に呼び出されて由美子のアパートに来ていた。

江戸川は、大山を見つけるなり、尋ねた。

「何が見つかったんですか?」

大山は、透明のビニール袋を差し出しながら言った。中には、30cm位の長さの茶色っぽい髪の毛が入っていた。

「髪の毛だよ、この長さから見て、女の物じゃないかな？、田辺の右手に巻き付いていたんだ」

英吉が尋ねる。

「第一発見者の女友達のじゃないですか？」

大山は、首を横へ振った。

「その娘は、ショートカットなんだよ。だから別人の物だな」

大山は、手帳を取り出して、読み出した。

「第一発見者で、自称ただの友人の北野妙子によると…彼女の知る限りでは、男友達に髪の毛の長いのは居ない。他に女も居ないそうだ。ただ、隣の部屋の、OLが彼に色目を使っていて、嫌な感じがしたとは言っている」

英吉は、205号室の隣に目を移し、

「隣の部屋って言うと、由美子のことですね？」

大山が頷く。

「ああ、もう一度事情を聞いてみる必要が、あるみたいだな」

大山は何か思い出したらしい

「あ、それからもう一つ。凶器は、間違いなく田辺のナイフだ。田

辺の指紋が検出された。ただ、田辺の指紋しか発見されなかった。だから犯人の手がかりらしき物は、いまのところ髪の毛だけだ」

ここで、沈黙考していた江戸川が、口を開いた。

「大山さん、今晚、ここに事件の関係者を集めてくれませんか？」

大山は、請け合った。

「構わないけど、何か解ったのかい？」

江戸川は、何も言わなかった。

今回ちょっと短いですね。

次のシーンから謎解きの大詰めです。

次回完結部分までアップします。

文中の

「この時期そんなカッコでうろついているからだよ」というのは、

執筆当時、棒状の凶器を使う通り魔が頻発し。

話題になっていたことから書いたものです。

【アイス】物を書いてアップしたいんですけど。

【ストリートヘア】娘は無口すぎて話を進ませづらいし、

【ツインテール】娘は暴走した拳句に最後は、

「いじめてフェロモン」を放出しまくるし、

【ポニーテールに眼鏡】娘は、話を進ませやすくして楽なんですけど、ちよつと油断すると一気に「18禁」の領域まで突っ走ってしまうんですよ。

話を練りこむのもうちよつとお待ちください。

2作目の「レモン味？」はちよつと練りこみが足りなかったかなとも思いますんで。

シーン16 由美子帰宅シーン18・9（前書き）

このお話はフィクションです、実在の人物団体等とは一切関係ありません。一応推理小説です。後半格闘シーンがありますし、人死に出ます。ご注意ください。この話で描写されている内容を模倣しないでください。電気関係の法律に違反する可能性があります。

シーン16 由美子帰宅〜シーン18・9

シーン16 由美子帰宅 〱由美子のアパート、田辺の部屋〱

由美子が、帰ってきたときには、恵美子も一郎も、お手伝いの常盤も、すでに集まっていた。大山は、開口一番。透明なビニール袋に入った髪の毛を見せながら、

「これは、今回の被害者の田辺の部屋から見つかったものです。由美子さん、あなたの髪の毛のように見えるんですが」

由美子は、肯定した。

「ええ、多分、私の髪の毛だと思います」

大山は、詰め寄った。

「どういう事なんです？、こう言っちゃ何だが、あなたは、彼を嫌っていたんじゃないかなかったですか？」

由美子は、説明を始めた。

「田辺さんに、私が出したゴミ袋を盗まれたことがありますから、多分その中に入っていたんだと思います。私は田辺さんの部屋の中には、入ったことはありません」

江戸川が口を開いた。

「嘘付いても解りますよ？、あなたは、昨日田辺さんが、殺害され

たとき部屋の中にいた筈なんです。証拠もあるんですよ?」

由美子は、眉間にしわを寄せて聞き返した。

「どんな証拠があるって言うのよ?」

江戸川は、直接、その問いには、答えず。

「動機も解ってるんですから」

由美子がものすごい目で江戸川をにらんでいる。しかし江戸川は、百戦錬磨の闘牛士のように余裕綽々だ。

シーン16・5 動機は……
↳由美子のアパート、田辺の部屋

江戸川は、一枚の写真を取りだした。大山が蹴り壊した205号室のメールボックスに入っていた物で、常盤邸をバックに髪の毛の長い女の後ろ姿が写っている。

「これは田辺が撮ったものと思われる写真です。おそらく、三四郎さんが殺害された夜に写された物です。これに写っているのは、あなただ。そう、あなたがあの夜、常盤邸に来ていたという証拠になります。動機は、強請のネタのこの写真を取り上げるため、違いますか?」

由美子は、あきらかに動揺した。江戸川は、そんな由美子を冷やかな目で見つめながら話し続けた。

「それから…証拠は、指紋です。田辺の部屋の電話から、由美子さん、あなたの指紋が検出されたんです」

由美子は叫んだ。

「嘘よ！、ちゃんと拭き取ったんだ…から…」

江戸川が、同情を禁じ得ないと言った表情で言った。

「あなたに田辺さんを殺す気がなかったのは解っていますよ。昨日この部屋で何が起こったのかは、想像するしかありませんが…あなたは写真のことで呼び出された。そして、田辺がアーミーナイフを持ち出してきた。もみ合っている内に田辺は、自分の腹に凶器を突き立ててしまった。つてところじゃないですか？。殺意があつたのなら、最初から凶器を用意して手袋をして来たでしょうからね、三四郎さんを殺害したときのように」

江戸川は、振り向いて一郎に話しかけた。

「三四郎さん殺しのトリックを考えついたのは一郎さんですね？、容疑がかかるあなたと恵美子さんには、完璧なアリバイを用意して容疑をそらした。そして、動機と知識の点で、安全地帯にいる由美子さんが実行する事とした。そして恵美子さんに入る多額の保険金は、後で三人で、等分に分ける計画だった。違いますか？。あと、メーターの下にあった足跡の靴の大きさなんかは、どうしても出来ますよね。靴の上にもう一つ靴を履くとか」

一郎は、溜息を一つ付くと、頷いた。

「ええ、その通りです。父殺しについては、弁明するつもりはあり

ません。私は、尊属殺人を犯した人非人です。ただ、田辺って人については、正当防衛っていうか……事故なんですよ。死んじゃったのは気の毒だと思いますけど、自業自得だと思います。それにしても、よく、彼の電話を使った事が解りましたね？」

江戸川は、少し照れたようだ。

「田辺を座椅子まで運んだり、二階のベランダから外へ出るのは、由美子さんには、荷が重いと思ったんですよ。ここの電話を使ってあなたを呼んだのではないか、と思ひましてね」

一郎は、片手をあげた。

「もう一つ、あの写真は何処にあったんですか？。あんなに探しても見つからなかったのに」

江戸川の顔に、困ったような笑いが浮かんだ。

「まあ、それはその、いろいろと。蛇の道は、蛇とでも言いましようか……」

一郎は、双手を上げて降参した。

「参りました。大山さんが、あなたを連れてきた理由が解ったような気がします。ただ、この件の首謀者は、あくまでも私です。姉も妹も私の計画に従っただけなんです」

由美子が泣きながら言った。自分の失敗で……という想いが泣かせるのだ。

「お兄ちゃん、何言ってるのよ。あたしが実行犯なんだから……」

恵美子が、遮った。

「あんたも黙ってなさい。探偵さん、この件を計画したのは私です。前もって多額の生命保険をかけていたのがその証拠です」

大山が、咳払いした。

「まあ、色々言いたいこともあるのですが、後は、こちらでうかがいます。任意同行していただけますな？」

一郎たちは、頷いて大山に導かれて歩き出した。

江戸川は、大山たちの乗った車が走り去るのを見送りながら、背伸びをした。振り向き二人に向かって言う。

「せっかくの日曜だし、これからみんなで遊びに行かないか？」

しかし英吉は、冗談めかしてこう返事した。

「僕は、ちびまるこちゃんの録画予約してくるの忘れたんで、帰ります」

江戸川も深くは追求しない。

「そうか、ならしょうがないな。絵美ちゃん、二人で行こうか？」

絵美は、もちろん首を縦に振った。英吉は、絵美の感謝のまなざしに見送られて、マウンテンバイクで走り去った。商店街に流れる

BGMは、カーペンターズ。…… Just Like Me They Long To Be…… 絵美が、BGMに会わせて小声で歌いだした。

「CLOSE TO YOU……」

シーン17 八日後、午後の…… 江戸川探偵事務所 9月8日(月)

A L C三階建て、味もそっけもない 中略 の二階。江戸川探偵事務所である。

英吉は、慣れないワープロに向かって異種格闘技戦：じゃない、浮気調査の報告書を作成しようと悪戦苦闘していた。キーボードが、彼の手に比べるといかにも小さく、かなり打ちづらそうだった。外野は絵美に頼めばいいと思うのだが、英吉曰く

「嫁入り前の娘さんにこんなの頼めませんよ」

だそうだった。この事務所の中で一番若いくせに、頭の中身がかなり古くさいようだ

絵美は、心配そうに見守っている。

「(そんなに力いっぱいキーをたたいたら壊れちゃう)」

ワープロを心配しているようだ。

江戸川は、新聞を読んでいる。思想的に中立の立場を守るために常に複数の新聞を取っているのだから読み終わる頃には、手が真っ黒に

なってしまう。新聞をおいて席を立つた江戸川に絵美は言った。

「先生、手を洗う前にその辺の物をさわらないでくださいね、新聞のインクで真っ黒になっちゃいますから」

と、そこへ、招かれざる……要するに、大山がやってきたのだ。

「きょうは、何なんですか？」

絵美の態度は、すこぶる冷たい。さすがの大山も少しひるんだが、

「常盤邸の殺人事件の取り調べが終わってね。色々知りたいんじゃないかと思ってね」

英吉が、ワープロから顔も上げずに聞いた。

「公務員には、守秘義務って言うのがあるんじゃないんですか？、そんなに、みだりに人に話しちゃっていいんですか？」

大山は、英吉には反撃するらしい。

「うるさいな、近頃、君、生意気だぞ」

江戸川探偵事務所の面々による、歓迎？、の挨拶がすむと、大山は気を取り直して話し出した。

「動機元になったのは、母親の死だ。若い頃と違って、年をとってきて低肺の発作に苦しむようになった三四郎氏は、妻に当たり散らすようになったんだそうだ。発作がひどくなって行くにつれて、母親に対する虐待もひどくなって……、彼らは、父親に対する

憎悪を深めていったんだ。あぐく母は責め殺されるように早世してしまった」

英吉が、ワープロから顔を上げて質問した。

「その、母親が亡くなったのってずいぶん前の話ですよ？」

「ああ、十年前だ」

窓の外のセミの声もめつきり小さくなっている。もう夏も終わりのだろう。子どもたちも、学校が始まり、休み中ほど公園には来ていない。

大山は、絵美が煎れた紅茶を受け取りながら話を続けた。

シーン 17・5 （今年の春） 4月2日水曜日 ー常盤邸ー

一郎は、父に頼まれたエアコンの取り付けに来ていた。病人の父から金を取るわけにもいかずボランティアのようなものだ。父、三四郎が、低肺の発作に苦しむようになって何年になるのだろうか。父に当たり散らされていた母も亡くなり、実の親子なのにすっかり縁遠くなってしまった。今日取り付ける機械は、単相200Vで動くかなり大きな物なので、一人ではとても取り付けることが出来ないため、工事は4人がかりだ。天井の一部をはがし、配管工事。そして機械を釣り下げる鉄骨を流して、ようやく室内機を釣り下げ終わったところには、時計の針は午後六時を回ってしまっていた。

「まあ、今日は、こんなもんだろう。室外機取り付けは、明日だな」

一郎は、部下に撤収の指示を出すと、三四郎に報告しに行った。

三四郎は、書斎で、手伝いの和光と話していた。一郎が入り口の引き戸をノックしようとする、引き戸と戸あたりの間の隙間（酸素のチューブが通っている）から話し声が聞こえて来た。

「和光さん、いつもすまないねえ」

三四郎の顔には、鼻から酸素を送るためのチューブが付けられている。酸素濃縮装置から来たチューブは、三四郎の胸の上、首の辺りで二つに分かれ、後から耳にかけられて鼻の前のパイプで一つに戻る。三四郎は、そのパイプから酸素の供給を受けているのだ。三四郎は、かるくせき込みながら、話を続けた。

「私は、このチューブと、和光さんがいなかったら、一日だって生きていかれないよ。私にもしもの事があつたら、遺産は全部和光さんにあげるからね」

「そんなことおっしゃらずに一日でも長生きして、一つでも多く小説をお書きになってください」

「いや、本気だよ。ろくに会いにも来ないあいづらには、びた一文だって遣してやるもんか。いずれ、弁護士さんと呼んで正式な遺言状を書くからね」

和光は、全然本気にしていないのだが、とりあえず、話を合わした。

「はいはい、でも、そんな物が必要になる日が、来ないようにお体

をお大事になさってくださいね」

一郎は、引き戸のこちら側で、身じろぎもせずに聞いていた。その目には、小さな炎が宿っていた。

シーン１８　江戸川探偵事務所　９月８日（月）

大山の話が続いている。

「漠然とした悪意がはつきりとした殺意に姿を変えたのは、今年の春の事だったらしい。一郎は、常盤邸のリビングに大きなエアコンをとりつける工事をした。ただ同然の料金でやらされたらしい。そのとき一郎は、三四郎が、遺産のほとんどすべてを手伝いの和光に遺そうとしているのを知ってしまったんだ。一郎はその晩、恵美子と由美子に会いにいき、普段は飲まない酒を、浴びるように飲んだそうだ」

「一郎も理性では、顔をほとんど見せない冷たい実子より、普段自分の面倒を見てくれる和光さんに金を遺したくなる気持ちは理解できると言っていた。ただ、感情はそうはいかなかったらしい。長年連れ添った妻：自分たちの母を責め殺しておいて他人に遺産を遺そうとする父を許せなかったんだそうだ。殺害のトリックは、エアコンの電源を都合するために、分電盤を取り替えているときに思いついたんだそうだ」

大山は、いったん言葉を切り、出された紅茶を一口すすって話を続けた。

「誤算だったのが、田辺の存在だったそうだ。由美子の後をいつも

尾行して歩き、あの日もすべてを見ていたんだ…」

ほかに誰も話す者もなく、ただ大山の声だけが響いていく。

シーン 18・5 (ちよつと前) 8月29日金曜日 〳由美子のアパート、田辺の部屋〵

田辺の部屋の中は、病的なまでに整頓されていて、塵一つ落ちていない。普段どんな生活をしているのかまるで想像が出来ないほど生活感の乏しい殺風景な部屋だ。

玄関を入ってまっすぐ行つた突き当たり(南東側の角)にはテレビボードがあつて、中にはビデオとミニコンポ、数本のビデオテープ。上には36インチのワイドテレビが据えられている。テレビボードの両脇にはミニコンポのスピーカーがある。部屋の中央には、斜めにソファベッドが鎮座在している。部屋の南西側の角には、腰までぐらいの高さの本棚があり、本やCDが、入っている。部屋の東側の壁には、コルクのボードが取り付けられていて、田辺のナイフのコレクションの中でも特に彼自身が気に入っている10本が掛けられている。

田辺に呼び出された由美子は部屋の中に入るなり、言った。

「何の用なの？」

田辺は、由美子の質問には直接答えず、はぐらかすように言った。

「貴女の父親が殺されたって聞いたもので…」

「用がないなら帰るわよ!？」

田辺は由美子が特に嫌っている、独特の歌うような口調で、

「私は8月25日の夜中、正確には日付が変わった8月26日の午前1時頃、たまたま、石橋本町にいましたね。不審な人物が、貴女の父親の家の敷地に入っていくの目撃したんですよ」

由美子の、顔色が変わった。

「そ、それが、あたしに何の関係があるっていうの!？」

田辺は、由美子の動揺を見逃さなかった。疑惑が確信に変わる。

「とぼけてもだめですよ、私はすべてを見ていたんですからね。それに、たまたまカメラを持っていたので。当然、写真も撮らせてもらいました。ま、信じる信じないは、貴女の勝手ですけどね。でも、こういう話を、お巡りさんはほっとかないと思いますよ」

由美子が青ざめた顔のまま言った。

「な、何が望みなのか？」

田辺の目が細くなり、爬虫類のような光を帯びた。

「僕は貴女のような勝ち気な女性を支配してみたいと、常々思っていたんですよ。今までいろんな女性をモノにしましたが、貴女のようなタイプは未経験でしてね。今更じたばたして興をそぐようなまねはよして、お互い楽しむことにしませんか？。まだ夜は始まったばかりなんですから」

由美子は、観念したように俯きながら言った。

「先にシャワー使って」

田辺は、由美子のいつそ潔いと言える態度に満足したのか、素直にユニットバスの中へときえていった。由美子は、それを確認すると、やおら家捜しを始めた。田辺のあの自信に満ちた態度の裏にある、写真を探すためだ。写真さえ、写真さえ取り上げてしまえば、逆転することも出来るのだ。テレビボードの扉を開け放ち、中にあったビデオテープをフローリングの床にぶちまける。本棚の中身も残らず床に放り出し、本一冊一冊のページの間を調べていく。

夢中で探していた由美子は、ユニットバスから田辺が出てきたのに気付かなかった。

「無駄ですよ、そんなに簡単に見つけられるような所になんか隠しませんよ」

由美子は田辺の存在を無視して探し続ける。田辺はそんな由美子を見て、わざとらしく溜息を付きながらこう言った。

「やれやれ、貴女はまだご自分の立場がよく解ってらっしゃらないと見える。とにかく、これ以上部屋を荒らされてはけません。聞き分けのないじゃじゃ馬には鞭が必要です。あんまり手荒なことはしたくなかったんですかね」

コルクボードに飾ってあったナイフを片手に由美子に迫る。

「やめて！、離して！！」

二人は、そのままつれ合うようにして倒れ込んだ。

シーン 18・9 江戸川探偵事務所 9月8日（月）

大山が話続けている。

「由美子は、自分たちは殺人狂じゃないから、田辺まで殺すつもりは毛頭無かったって言っている。田辺の部屋を荒らしたのは、田辺の事件を強盗の仕業に見せかけて由美子が疑われるのを防ぐつもりもあったらしい。まあ、この件については、そんなに重い罪にはならないと思う。言葉は悪いけど、やはり自業自得って感じがするもんなあ」

大山はすっかり冷めてしまった紅茶を飲み干してつけ加えた。

「この事件が解決したのは、君らのおかげだ、改めて礼を言つよ」

英吉が、大山の言葉を引き取って

「え？、今夜焼き肉食べ放題に連れてって下さるんですか？。いやあ、嬉しいなあ。焼き肉や、しゃぶしゃぶは他人のお金でつてのが、僕の座右の銘なんです」

大山は、慌てて言った。

「君に腹一杯焼き肉食われたら、破産しちゃうよ。回転寿司辺りで、手を打ってくれよ」

絵美が、笑いながら言った。

「護国寺君は近くの回転寿司で大食いの記録保持者なんですよ？。銀行で預金をおろしてきた方がいいかも……」

大山の背中を冷たい汗が流れ落ちていった。

シーン16 由美子帰宅〜シーン18・9（後書き）

私的な事情で【アイス】物の続きを書く心情になれず、
こちらを先にアップすることにしました。

下記に短めなネタ（妄想）がありますのでよろしかったらどうぞ。

<http://blogs.yahoo.co.jp/habacchi1969/43209828.html>

あと、5つ目「シーン9 急展開？、何が？〜シーン12・9 チ
ヤリンコリンリン」に

”ポケベル”が残ってしまっていたので、”携帯”に修正して文脈
の前後を整えました。

なにせ、10年前に書いたものですから。

このあと、エピソードがあります。

直美ちゃん再登場

2008/07/16 修正

回想シーンに思いつき「1997年」とあったので修正。
攻める↓責める

誤字の修正

いや〜あちらこちらに10年という歳月が・・・

本文中は全角の英数字を使うように心がけて書いてました。

そこら辺は変更せずにそのままアップしてます。

二〇二〇のアカウントお持ちの方へ。

おすすめ「Close to you」
↓
sm2908966

エピソード（前書き）

このお話はフィクションです、実在の人物団体等とは一切関係ありません。一応推理小説です。後半格闘シーンがありますし、人死にが出ます。ご注意ください。これで、とりあえず完結です。

エピソード

エピソード

仙川駅への近道になる暗い道。朝や昼ならいいが、夜に女の一人歩きは勧められない。案の定、背の高い女の子が二人組の男に追われている。

スリムのジーパンと、白いＴシャツ、背中の中程までの髪も揺れている。

「やっぱり近道なんか止せばよかった」

もう、そんなに距離が離れていない。彼女にとってさらに悪いことに、道が、鬱蒼と繁った暗い雑木林に沿ってのびていた。やがて追いつかれた彼女は、雑木林の中に引きずり込まれた。二人がかりで押さえ込まれて、抵抗する手段のすべてが奪われた

「（もうだめかしんない）」

彼女が諦めて体の力を抜こうとしたその時、高らかなラッパの響きとともに騎兵隊が：じゃない。大声とともに一人の男が現れた。

男は、道から雑木林をのぞき込んで、叫んだ。

「おい！、何をしているんだ、貴様ら」

その男を見た彼女は、助けが来たと一瞬膨らんだ希望が、みるみる縮んでいくを感じた。現れた男は、身長160cmにも満たない小柄な青年だったからだ。トレーニングパンツに半袖のＴシャツ、どうやら、ジョギングの途中らしい。一瞬ひるんだ賊も、相手が小

柄な男でしかも一人なのを見て、すぐに余裕を取り戻した。

「うるせえ、怪我したくなかったら、とつと失せろ」

暴漢二人は、まるで相手にしようとしない。だが彼らは、相手の実力をはかり損ねていた。その男は、柔剣道会わせて7段の猛者だったのだ。男は、雑木林の中に飛び込んでくると、一人目の男の顎に裏拳を見舞った。あわてて向き直る二人目には、返す拳で右フック。体格や、腕力の違いを補って、なお、あまりあるすさまじいまでの戦闘技術だ。息も切らしていない。

「大丈夫かい？、怪我は無いかい？」

男は、彼女を軽々と助け起こすと、携帯をとりだし、110番した。彼女は、驚きで声も出ない。彼女よりも20cmは、背が低いであろう男が、体格に勝る二人の男をあつと言う間に片づけたのだ。

彼女は、男が電話を掛け終わった頃、ようやく我に返った。

「あ、ありがとうございます」

「いいよ、礼なんて」

と、そこにパトカーがやってきた。パトカーから降りた警官は、男を見るなり、敬礼した。

「大山警部！！、只今到着いたしました」

大山は、苦笑した。

「…オレは今日、非番なんだ。堅苦しいのは抜きにしてくれよ」

「…（名前、大山さんっていうんだ…）」

次の日 午後三時、お茶の時間だ。江戸川も英吉も外出していて、絵美一人が事務所にいる。絵美が、ティーポットにダージリンを一匙入れたとき。階段を上がってくる足音が聞こえて、事務所の入り口のドアが開けられた。

「また来たの？」

ドアから入ってきたのは、彼女よりも22cm背が高い、妹の直美だった。

「あ、ちょうどよかった、あたしにもお茶頂戴」

絵美は、紅茶を手渡しながら。

「あたしはここで仕事してるんだから、しょっちゅう遊びに来ないでよ」

「いいじゃない。ここって、あたしよりも大きい人が居る、貴重な場所なんだから」

絵美は、意外そうだ。

「へーあんだ、護国寺君が目当てなの？」

直美は笑いながら答えた。

「じょーだんよ」

絵美も笑っていたが、急にまじめな顔になってお説教を始めた。

「あんたってば勉強もしないで遊び歩いているけど、大丈夫なの？。
一応受験生なんでしょ？」

「平気よ、あたし高校卒業したら、ここでお世話になるつもりだから」

「なにいつてんのよ」

そこへ、今日二人目の招かれざる客がやって来た。

「おはようさん。あれ、お客さん？」

大山である。大山は、視線を上げていった先に、見たことのある顔を発見した。

「あれ？、君は……」

「大塚直美です。来年の4月から、こちらでお世話になるつもりですので……よろしく!!」

出先で江戸川が、くしゃみを、一つした。

了

エピローグ（後書き）

最後まで、お付き合いいただき、ありがとうございます。

10年前に書いて、続編も書かずにそのままほった理由は、あらたな殺人のネタ、トリックを思いつかなかったからなんです。それと、乱闘シーンや、憎悪をつのらす恨みつらみのシーンを書くことが苦痛で、

イヤでイヤでしやうがなかつたんですね。

エピローグはとっと書き終わったのに、

シーン16　～シーン18・9（7つ目相当分）が全然できなかったことを覚えています。

「好きこそ物の上手・・・」とか言うと思いますけど、

「イヤこそ物の下手・・・」みたいな出来だと思えます。

今回、修正するところがあるか、ざっと読み直すのも辛かったです。

そんな訳で、暴力シーンや、人死にが出る話は、あらたに書けそうにないんですが、

この登場人物たちには愛着があるので、

10年前に書いた「ネタ帳」にある小ネタを消化しつつ、

探偵物でないエピソードを書いていこうかなと。

（探偵が出てきて探偵物でないって、どんなのだ？）

予定であって、決定ではありません。すいません。

10年ぶりに開くんですが、ネタ帳の中には直美ちゃんの話とか、英吉くんの話とか、絵美ちゃんのキスシーン案があるハズ。

（キスシーンのシチュエーションは【アイス】物で使ってしまった）

10年前の自分に言ってやりたい。

「どうしてネタ帳だけ一太郎形式でしか残さなかったんだよ、この

バカ」

最近ワープロソフトって全然使わないんで、メインのPCにはインストールしてないんですよ。

Word 入りのPC まで持っていてってWord で無理やり開ければよし、

開けなければ一太郎をインストールするしかないかなと・・・

使っているテキストエディタは、メモ帳とTepaEditorです。

【アイス】物を書いたり【ABO】のあとがきを書いたり修正するのには、

Story Editor を使っています。

話数、それぞれのあとがき等を階層構造で管理できるので便利ですよ。

キーボード左側のCtrlキーが調子悪いので、

「Ctrl+C」が「C」、「Ctrl+V」が「V」になったり

して、肝をつぶす毎日です。

2008/08/15

続編といえますか。

このシリーズで短編の連作を始めました。

ABO式ドロップス

<http://ncode.syosetu.com/n8583e/novel.html>

よろしかったらご覧ください。

蛇足。ちよつとネタばらし

このお話はフィクションです、実在の人物団体等とは一切関係ありません。一応推理小説です。後半格闘シーンがありますし、人死に出ます。ご注意ください。この話で描写されている内容を模倣しないでください。電気関係の法律に違反する可能性があります。

- - - - -
- - - - -

蛇足ですが、ちよつと電気の話。

私は電気工事、空調工事に携わっていたことがあります。

第二種電気工事士免状を取得していますし、

第一種電気工事士試験に合格しています（免状未取得）。

その辺から、このネタを思いついたんですが、

通常、こんなアンバランスな工事は行われません。

シーン18 で大山さんが説明してますが、

エアコン工事、電気工事、分電盤の交換を行った人物（一郎）が、

赤い回路、黒い回路のバランスをわざとアンバランスに設計したものです。

なので、実際の建物、構造物でこういう現象が起きる可能性はかなり低いと思います。

「よいこのみんなはまねしない」

くれぐれも、実験、実行しないでくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3295e/>

ABO式殺人事件

2010年10月10日13時59分発行